

第125回テーマ 六甲山系のチョウ

- 六甲山系のチョウと食草
- 離宮公園のバタフライガーデンづくり
- 「あっと」驚くチョウの生態



講師：谷本 祥二さんプロフィール
1955年(昭30)生まれ、60歳。高松市出身、垂水区在住。1978年神戸大学経済学部卒業、証券会社勤務を経て、1987年から学習塾経営。小学校3年生のときから蝶のとりこになり、少しのブランクを経て現在に至る。須磨離宮公園でバタフライガーデンづくりや観察会。小学3年生の環境学習も手伝っている。



日本一長い蝶採り網

実施日：平成28年4月16日(土)
午前10時～15時10分
場所：六甲山自然保護センター、
記念碑台・散歩道

「森と歴史の散歩道」でチョウの食草を探す

午前の記念碑台は快晴で20℃、谷本さんと参加者12人が「森と歴史の散歩道」を歩いてチョウの食草を探した。記念碑台から「まちっ子の森」を経由して、六甲山ホテル東端から記念碑台に戻った。道すがら、テングチョウ、クロヒカゲ、コツバメ、アカシジミ、ジャコウアゲハなどチョウが見られる時期と食草を解説してもらった。

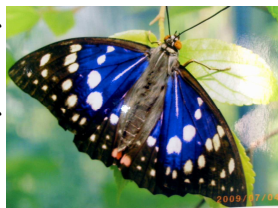


まちっ子の森で解説

谷本さんの原点はオオムラサキとの出会い

兵庫県立人と自然の博物館の八木 剛先生から、「六甲山系のチョウの変遷」に展示協力される谷本さんを紹介していただいた。谷本さんとセミナーの準備でたびたびお会いして、かなりのチョウの研究家であることを知った。

郷里の高松で小学校3年生の時、チョウの専門家の導きでオオムラサキと出会って、チョウの世界に入ったとのことだ。日常生活では、奥様もチョウの採集家で、チョウに関係する予定を決めてから、年間の予定や計画を考えるとのことと、チョウ中心の生活の様子だ。



日本の国蝶オオムラサキ

今回のセミナーでは、成人向けのセミナーにすることと、当会が整備している「森と歴史の散歩道」の食草を調べてもらうことをお願いした。

「チョウを知ってもらいたい」という熱意が伝わる

午後の講演では、前段として、午前中の自然散策で観察したチョウの食草と、チョウの見られる時期を説明し、「チョウにとっては気に入らないコースだろう」と残念そうだった。

続いて、「六甲山系のチョウ」について約82種類がいることやアサギマダラが多いことなどを紹介された。次に「離宮公園のバタフライガーデン」について、スライドを使いながら説明された。去年の5月から須磨離宮公園の東端でバタフライガーデンづくりをされ、丸1年で45種類のチョウを呼べる状態になっている。バタフライガーデンで見られるチョウ

主催：六甲山を活用する会

協力：兵庫県立人と自然の博物館

後援：神戸県民センター、灘区役所、神戸市教育委員会

ウの紹介や、家庭でのバタフライガーデンづくりへと話題が進んだ。

休憩時間にセンターで開催している「六甲山系のチョウの変遷」を見学し、主催者の平尾さんから標本の説明も聞くことができた。

後半は、「あっと」驚くチョウの生態と題して、あまり知られていない変わった生態を次々と紹介された、鳥を惑わす擬態や、気温や地域での変異などに目を見張った。

最後は、カラスアゲハの吸蜜を実演していただいた。ストローを伸ばして蜜を吸っている様子を目にして、参加者は興味が高まりざわついた。チョウづくしの1日で、皆さんが童心に返ったようだった。



展示会の標本を見学

まちっ子の森はチョウの食草が少ない

チョウの目から「森と歴史の散歩道」を見てもらった。予想以上に食草が貧相であることを確認した。放置山林化した六甲山上の生態系の問題が明らかになったようで、植生の多様化などの課題を実感する。そんな中でも、時期を選ぶといろいろなチョウが見られることに勇気づけられた。

※詳しくは2ページをお読みください。

参加の感想 向山さん

標本を見ながらお話を聴くことで、とてもわかり易く自然保護の大切さを感じました。西区神出町にある雌岡山では、生息していたギフチョウが、40年前に絶滅したと聞きました。環境の変化、人為的等が考えられます。



「六甲山を活用する会」の活動は、生き物たちと共存できる環境づくりの一役を担っている事業だと感じました。初参加でしたが、メンバーの方たちを身近に感じ嬉しくなりました。ありがとうございました。

【助成金をいただいている機関】 順不同

大阪コミュニティ財団(東洋ゴムグループ環境保護基金)、
コープこうべ環境基金、セブン-イレブン記念財団